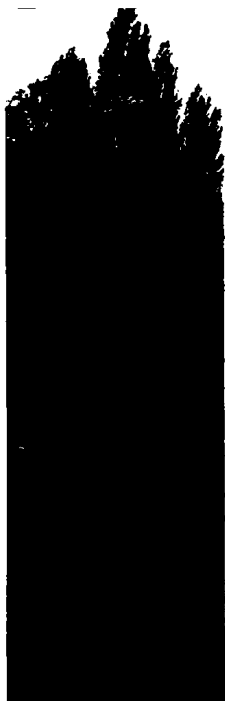


LOOK AT ME

おれを見てくれ

宮内勝典





LOOK AT ME
おれを見てくれ

宮内勝典

新潮社

LOOK AT ME — おれを見^みてくれ

著者／宮内勝典^{みやうちかつすけ}

★

印刷／昭和58年 2月15日

発行／昭和58年 2月20日

発行者／佐藤亮一

発行所／株式会社新潮社

郵便番号162／東京都新宿区矢来町 71／振替東京 4-808

電話・業務部 03 (266) 5111・編集部 03 (266) 5411

★

印刷所／東洋印刷株式会社

製本所／大口製本株式会社

★

定価／1000円

© Katsusuke Miyauchi, Printed in Japan. 1983

ISBN4-10-344901-2 C-0095

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお替えいたします。



LOOK AT ME / 目次

★アメリカへ、インドへ

ニューヨーク時代 9

シルクロードの砂漠をへて 24

バビロンの塔 41

★南国の港町から

混血の波打際で 61

神話としての土地へ 69

ふるさとの奥行が浅くなった 76

坊の岬、地球の風景 89

五年の歳月 96

ブルータス、おまえもか！ 104

迷路の片隅のジャズ 21

さまざまな聖者たち 32

ヤポネシアの漁港 65

スペインと九州 72

沖縄の友 82

カリフォルニアの二世・三世たち 92

漂泊の血 101

蒙古人種モンゴロイドのヒト 107

★ふたたび、旅へ

若者と旅 115

インド旅日記 122

ボンベイ——人間蟻の世界へ 122

デカン高原——混沌を乗せる列車 127

ヒマラヤ——光りへ 132

サルナート——豊かな廢墟 137

カルカッタ——世界最悪の都市で 141

時代の風の曲り角——ジョン・レノンの死 145

★言葉と眼

日本語を捨てきれなかった 153

通過儀礼としての放浪 118

プーナ——瞑想のコミュニオン 124

リシケシ——ヨガの僧院ブジヤム 129

聖都ベナレス——神を呼ぶ場所 134

ブッダガヤ——大樹の陰 139

わが読書 156

LOOK AT ME! —— ジョン・レノンの叫び 160

南方熊楠の土蔵 169

タゴールの、ことばの宇宙 180

バイクは知覚増幅マシンだ 187

横尾忠則、ニュー・ペインティング創世記 199

核家族の方舟 206

熱帯の狂気 215

ニヒリズムを超える 230

あとがき 235

1930年代のヘンリー・ミラー 165

巨人グルジェフ 174

長髪を切って 184

現代美術のフロンティア 194

台所の日本兵 203

男と女 210

行方不明の精神科医とLSDの話 222

LOOK AT ME

I
アメリカへ、インドへ

ニューヨーク時代

ニューヨークのイースト・サイドに、通称イースト村ブレイクと呼ばれるスラム街がある。そこは、ブエルト・リコ系、イタリア系、ユダヤ系の移民や、その移民の貧しい子孫たち、ヒッピーたち、黒人街ハレムやアメリカ中のいたるところから流れてきた黒人たち、貧乏アーチストや、失業者たちが、ひしめき合うように住みつき、アルコール中毒者、売春婦、麻薬中毒者たちの吹きだまりにもなっている。

そのスラム街に住みついていた頃の出来事だった。アパートの部屋の隅に、埃ほこりをかぶったままの黒い電話機があった。ぼくがその部屋を借りる前に、そこに住んでいた誰かが置き去りにしていったものだ。もちろん接続を切られたままで役にもたない電話だった。ただ面倒だという理由だけで、ぼくはその電話機を部屋の隅に在るままにしておいた。そして、そのまま一年近くが過ぎた。

ところが、ある日、突然その電話機が、けたたましく鳴りだした。驚いて受話器を取ると、スペイン語なまりの英語が耳にとびこんできた。どう答えてよいものか、うろたえていると、

「まあ、どうしてたの、待ってたのよ」

と若い女の声を受話器の中で返答した。そして何事もなく会話が進行していった。ぼくは、あつげにとられたまま黙って受話器を置いた。しばらくして、また、電話が鳴った。

「ハロー、こちらはドクター・レーヴィンですが、そちら薬局フレイマシーですね」

そして、こちらが薬局かどうかを確かめようともせず、何々を何グラムと薬品の調合らしい注文がはじまった。黙っていると、

「そちら、薬局ですね？ ドラッグ・ストアでしょう？」 相手は訝いぶかしがって訊ねた。

「いいえ」と受話器を置いてから、ドラッグという一語が、なにか奇妙に気にかかった。ドラッグ・ストアそのものは町のどこにでもある薬屋のことだ。しかし、ドラッグ drug という一語は、本来の薬品のことよりも、麻薬ヘロインや、LSDをまず最初に連想させるからだ。……もしかしたら、とぼくは思った。もしかしたら、いまの電話は麻薬の密売者ブッシュヤイたちのものかも知れない。電話盗聴による発覚を防ぐために、電話の接続をかれらが細工したのかも知れない。それが何かの手違いで、この廃棄電話の線と接続してしまったのだろう……（ニューヨークの電話局は、その歴大さと複雑さのため、ほとんどいつも麻痺寸前の状態だった。おまけに、このスラム街のあたりでは、住人たちが長距離電話をかける時、勝手に細工して他人の電話に接続させてしまうことが日常茶飯事だった）。……そんなことを妄想しているうちに、また電話が鳴った。

「ドクター・レーヴィンだが、そちらベイズ薬局ですね」

いよいよ困惑して黙っているうちに、また受話器の中で、べつの声が答えた。

「はい、こちらベNZ薬局です」

廢品だった電話が、突然、ほかの二つの電話に接続されてしまったのだ。そして、数日後には、もう一つの電話にも繋つながっていることが判明した。ベルが鳴り、受話器を取ると、中年らしい女の声が、こちらの名前さえ確かめようとせず、いきなりこう訊ねてきた。

「こちらミセス・クラークですが、娘を知っていらっしゃいますか？　娘のスージーのことなんです。スーザン・クラークを知っていらっしゃいますね？」

「いいえ」

「きつと知っているはずですよ。娘の残していったノートに、この電話番号が書きつけてあるんですから」

「いや、ぼくは知りませんよ」

電話を切ると、数秒のうちにまたベルが鳴り、同じ声が聞こえた。

「もう、ほかの番号には、ほとんど電話してみたんです。娘に帰ってくるように言って下さい。お願いです、ただ帰ってきてくれって！」その声は、明らかに取り乱していた。

それから、毎日かならず数回ずつ、その母親から同じような電話がかかってきた。ノートの電話番号をかたっぱしからダイヤルを回し、同じ言葉を繰返しているのだから。一週間ほどたつと、彼女はほとんど錯乱しているかのようだった。

「娘は生きていますわね！　無事ですわね！　それだけでもいいんです。それだけでも教えて下さい。スージーは生きていますわね！　彼女はまた生きていますわね！」

She is still alive! その母親の叫びは、ぼくの耳には少しも滑稽に響かなかった。というのは、半年ほど前、ぼくにはそれに似た奇妙な体験があったからだ。それもやはり電話が発端だった。ある女友達の部屋にいたとき、見知らぬ人から突然に電話がかかってきた。話し終えて、受話器を置くと、

「変な話なの……」

と彼女は言った。ヴェトナムで一人の青年が死に、その死体が空輸されてきて、今日これから葬式を行なうということだった。青年のメモ帳に、彼女の電話番号が書きつけてあったのだ。電話をかけてきたのはその青年の母親で、少しでも多くの人に葬式に出席してほしいという願いだ。ところが、彼女はその青年を知らないというのだ。

「忘れたのかもしれないわ。デートを申し込まれたとき番号を教えたのかもしれない……」

その日、とりたてて何もすることがなかったので、「行ってみようか」と、ぼくたちは地下鉄で出かけて行った。

葬儀所は、レキシントン通りの24番街と25番街との間にあたるということだった。そこは、高層建築の林立するマンハッタンの中心区から、ほんのわずか離れただけの場所だ。こんなところに葬儀所があるのかな、と不思議に思いながら、ぼくたちは通りにそって歩きながら捜しはじめた。

24番街の方から歩きはじめて、いつの間にか25番街の四ツ角に行き着いた。どこにも葬儀所はなかった。通行人に訊ねても、一人も知っている者はいない。ぼくたちは首をかしげながら、ま

た24番街の方にひき返した。そして、ようやくそれを見つけたとき、その外観にぼくは啞然として立ちすくんだ。

ガラスのドアに FUNERAL HOME (葬儀ホーム) と記された文字さえなければ、まったく普通の事務所と変わったところもない外観だった。十数階建ての建物の一階にあり、階上も隣りも普通の貸事務所になっていた。ドアを開けて中に入ると、内部は小さなホテルのフロントのようだった。その奥に、ただ事務所の机や椅子を取り払っただけのように殺風景な広間があった。木の棺があった。その木という材質さえ、コンクリートや合成樹脂やガラスやステンレスだけの広間の中では、なにか異質なもののように見えた。

棺の蓋は開かれて、その中に死体があった。防腐剤やドライアイスで肉の腐敗をふせぎながら空輸されてきた死体だった。棺をうずめる花のなかから、青年の顔だけが見えた。ワックス・ミュージアムの蠟人形のように、無機的につるつる光っていた。明らかに、死後に補修された顔だった。その下に、腐敗を待つばかりの肉があるとは想像することさえ難しかった。

「覚えてる？」ぼくは小声で訊ねてみた。

「いいえ」彼女は無感動に十字を切りながら答えた。

あわただしく人々がやって来ては、死体の前で十字を切り、ある者はそそくさと出て行き、ある者は折りたたみ式の椅子に坐りこんだ。どことなく、ちぐはぐな雰囲気な葬儀だった。参列者たちは、おし黙り、時間を無為にすることに苟立ちながら、無表情な顔でこう言っているようだった。——死はとうに過去のものであるのに、まだ死体が頑強にここにあり、その死体に今こう

やって関り合っていないければならないのは不承知だ、と。

参列者のなかには、ぼくたちと同じように、突然の電話で呼び出されて来たらしい若い連中がいた。かれらは皆、なぜか茫然と放心しているように見えた。ヒッピーらしい二、三のカップルも胸のあたりまで垂れた長い髪を所在なげに指で弄もてあそんだりしていた。

葬儀が終り、棺は広間ホールから、専用の駐車場へ運び出された。そこに一台の、黒く、ものものしい霊柩車が待ちうけている様子を、ぼくは漠然と想像していた。しかし、そこには、ただ一台のキャデラックの大型車リムジンが駐車していただけだった。それが霊柩車だった。棺がつみ込まれ、肉親たちが乗車すると、リムジンは走り出した。そして通りに出ると、あつというまに車の洪水の中にもぎれ込んだ。ただ何事もなく、死体を乗せた車が一台、車の洪水にもぎれ込んだというだけのことだった。ぼくは突然、アメリカで四年近くも過ごしながら、ただの一度も「葬式」を見たことがない、ということに気がついた（空缶をいっぱいぶらさげて走る「結婚式」の車なら何度も見たことがあったが）。……その車の洪水の中で、いまにも見失いそうになる一台のリムジンを、ぼくはじっと眺めつづけた。それは一分間たらずのことだった。リムジンは、あっけなく夜の町にのみ込まれて消えていった。

その夜、スラム街を歩いて帰りながら、ぼくはあの死体が今どこかで焼却されつつあることを思った。この都市のどこかにある建物の中で（ニューヨークでは、高層建築の刑務所さえ町の真中にある）いま、自動点火の焼却炉の中で、ひっそりと火につつまれているはずだ。ぼくの脳裡には、インドの火葬の光景がこびりついていた。ガンジス河の岸辺で、太陽や風にさらされた